

福祉文化通信

～ Well-being への道～

2017.12.22 Vol. **84**

●発行者 / 広報委員会
稲田 泰紀・関矢 秀幸
●制作 / 長瀬 さやか

日本福祉文化学会事務局 〒305-0033 茨城県つくば市東新井 24-5 特定非営利活動法人 茨城 YMCA 内 Tel/Fax:029-896-9389 E-mail:fukushibunka@lagoon.ocn.ne.jp



1 上野千鶴子さん特別講演！ 2 研究プロジェクト中間報告！ 3 自主シンボは、Jリーグと病児！



上野千鶴子さん (撮影:菅野 勝男)

「ワクワクドキドキ」「フムフムナルホド」。この2つのキャッチフレーズで始まった第6期役員体制も今年度で終了。その総決算ともいふべき、第28回東京大会は、新たなチャレンジを試みる大会でも

TOKYO 東京

今年度の大会は2月18日。東京で会いましょう！

日本福祉文化学会会長 馬場清

第28回日本福祉文化学会全国大会 東京大会

《大会テーマ》
『いのちと暮らしを拓く 福祉文化の創造』
日時：2018(平成30)年2月18日(日)
(会員総会9時～/全国大会10時～)
(16時30分/懇親会16時30分～)
場所：立教大学池袋キャンパス
*詳細スケジュールは大会パンフレットを参照ください。

ある。いったい何が新しいのか？
1 点目は、上野千鶴子さんによる「死にゆく者の自律」「おひとりさま」時代の生と死」と題した特別講演である。これはこの間、研究委員会を中心に提言された「文化のメカネで福祉を見る」という当学会の新機軸にもとづく特別講演でもある。死に関わるすべての人がとらわれている慣習、制度、価値観など死に関わる福祉文化を、改めて考える機会となる。しかも今回は、大会後にも「おひとりさまの最期部会」を立ち上げ、継続して研究を進めるといふ企画もある。すでに2つの支部がその設置に名乗りを上げている。
2 点目は、「福祉文化研究・調査プロジェクト」の中間報告を会員にしてもらったことである。このプロジェクトは「時代に対応する学会の新しい方向性を打ち出すために」会員からテーマを公募し決定したものの。学会からの支援を受けた会員の意欲的な研究を、参加者みんなで考える。中でも「戦争と福祉文化」については、昨年度行われた沖縄での15年ぶりの現場セミナーの成果を受けての研究でもあり、おそらく今後、当会にとって大きな軸のひとつになると思われる。
3 点目は、自主シンボである。会員から公募した自主シンボの実施は、全国大会では初の開催である。そして今回は「スポーツ×福祉がひらく未来」と「病児や障がいのある子どもの生活と遊び」のふたつがエントリー。かたやJリーグ、かたや病児保育ヘルンと東京おもちゃ美術館の最先端の事例が語られる。まさしく会員自らが企画運営する自主シンボは、開催地の会員もより多く関われる絶好の機会となる。今後とも是非、継続していきたい。
この新鮮で魅力的な東京大会に、是非、一人でも多くの会員に足を運んでいただきたい。そして大いに福祉文化について語り合いたい。しよう！！

日本福祉文化学会 第7期新評議員候補者の会 開催いたしました！

日本福祉文化学会 事務局 前嶋 元

日時：2017年10月7日(土) 13:30～16:30
場所：立教大学池袋キャンパス 16号館 第1会議室

現三役、新評議員13名の出席で行われ活発に議論がなされた。

第7期の評議員選挙を受け、上位29名に新評議員候補者依頼を事務局より行い、21名から承諾を得た。

今回の会では評議員候補者21名の中から18名が理事候補者に選出され、承諾が

得られた。理事候補者の互選により、新会長候補者は「石田易司会員」とすることが決まり、石田会員の指名で「マーレー寛子会員」「永山誠会員」が副会長候補者に決まった。事務局は会長の近くに置くことが学会活動の活性化に欠かせないとの観点から、関西への移転案が承認さ

れた。
詳細は2018(平成30)年2月18日(日)の全国大会時の会員総会で審議し決定する。



BUNKA NO KOUSATEN -2-

文化の交差点②

*学会員から福祉文化のルーツを考える視点でお届けします。

異世代交流の場で聞く ふつうの会話の新鮮さと驚き

『こぼえ広場たまごの家』
加藤 美枝

「こんな大勢で食事をするのは初めて。家では手をつけないカボチャもいつの間にか食べてる！」3歳と5歳の男児を連れて来た夫婦が嬉しそうに話す。「賢くなるよ」「強い子になるよ」と外野のおじいとおばあに言われて、子どもたちははにかみながら嬉しそう。

「お魚ってこの向きで盛りつけるのですか」と手前に置いた切り身の背を向うに直す実習生。今までとくに意識したことはなかったと言

「恥をかかせては悪いと思って、頼むの遠慮してたんだよ」と持参された数本の縫針に白い糸、黒い糸を通して、繕い物をなさるんですねと感心しながら手渡したら、安堵の笑顔を見せた90翁。そう、たまごの家のスタッフは平均74.6歳。もちろん老眼・近眼・カスミ目いろいろではありますから。白内障の手術をして手許も遠くもパッチリ見えるようになったところで遭遇した糸通しの幸運でした。「これでよいです」と孫の結婚を機に、長年住んでいた居を自ら進んで明け渡し、老人ホームへ移っ



た91翁。あまりにも深くかつこい。この枯淡の境地は、姥捨て山伝説をふつと思いつきながら、現在の超長寿社会の一つのモデルでしょうか。
たまごの家は、2015年の介護保険改正による「介護予防・日常生活支援総合事業」の一環で、世田谷区の呼びかけによる住民主体型地域サービスです。研修を受けた63

84歳のスタッフが毎週1回の活動を4～5名交代で担っています。自身がハビリティに通ったり投薬治療を受けていたり障害者手帳を持っている人もいて、支援する人される人の境界は限りなくフアジーです。

事務局より

計報

去る5月に元副会長で、学会創設時から学会の運営および福祉文化の普及啓発に多大なる功績を取られた河島修さんが、逝去されました。ここに謹んでお悔やみ申し上げ、故人のご冥福をお祈りしたいと思います。

会員情報

- 2017年10月31日までに新規ご入会された方のお名前と所属ブロックをお知らせいたします。(敬称略)
(個人) 横溝一浩(関東ブロック)
吉田輝美(北陸ブロック)
西川愛海(中国・四国ブロック)
村田美穂(関東ブロック)
(団体) 実践女子大学図書館
- 2017年10月31日現在
(会員数) 個人会員 284名
団体会員 7団体

アンケート調査の結果報告

会員へのアンケート調査を行った。学会の把握しているメールアドレスをたよりに8月にアンケート用紙を3回ほど送信したがほとんど届かなかった。その後、会員ごとの所属から連絡先を調べ、職場の移転や転職先を追跡した。新設学部移動のため新住所をインターネットで追跡したがメール等は検索できず結局、紙ベースでアンケート用紙をそれぞれ郵送することとした。

9月20日までの結果は、宛先不明で返送3通、退会済み1通、返信なし2通、メール返信1通であった。基本部分からの立て直しを要する。

NPO法人「小さな種・こころ」の12年間の活動

福井県鯖江市にあるNPO法人「小さな種・こころ」(清水孝次理事長)は2005年からNPO法人「小さな種・こころ」、本人、行政、市民の4者の協力をえて、うつ病、自閉症、統合失調症の方がたが減農薬野菜を栽培し、さらに減農薬をつかったランチレストランやカフェテリアを運営してきました。福祉サービス中心とは異なり障害を持つ方がたの「働く場」「仕事の確保」を基本に据えた福祉活動をおこなっていることが特徴です。

とくに「NPO法人を中心にしたコミュニティ」づくりは、石井パークマン麻子氏等の協力により実践にもとづく研究、研究にもとづく実践によって発展がはかられ、このコミュニティの日常の生活が地域文化に溶け込み根を下ろす傾向があります。

2025年を目標とする地域包括ケアシステムの構築が進行中ですが、「働く場」「仕事の確保」を基本とする福祉実践は貴重な教訓を含んだもう一つの福祉モデルだといえます。



山のほだ場にて稚苗の原木栽培の様子

福祉文化研究・調査プロジェクトの採択結果について

5件の応募があり、条件付きではあるが、すべて採択された。前田美也子(武庫川女子大学)氏の辞退により4件でのプロジェクト開始となった。なお、研究成果について中間報告(研究計画)を2018年2月に開催予定の全国大会(東京大会)で発表し、最終報告を2019年8月末日締め切りの『福祉文化研究』に投稿して発表する。

No.	分類	メンバー代表者	研究テーマ	助成額	アドバイザー
1	理論	○篠原拓也 (奈良教育大学)	戦時に福祉文化を実現させた思想一板東俘虜収容所における文化的活動を題材として	100,000円 *共同研究の方法を探り、経費を分配する	加藤美枝
2	理論	○結城俊哉 (立教大学)	「戦争文化に抗する福祉文化思想の基盤研究」		加藤美枝
3	調査	○福山正和 (桃山学院大学)	福祉・介護従事者の文化的活動への参加について調査研究	100,000円	佐藤 嗣道
4	実践	○前田美也子 (武庫川女子大学)	韓国の地域児童センターにおける文化プログラム実践	それぞれ 50,000円	藺田 碩哉
5	調査	○滝口真 (西九州大学)	高齢者施設における福祉レクリエーションの日韓比較調査研究	*協力できる部分は 共同研究とする。	藺田 碩哉

現場セミナー2017 in おきなわ 報告集 発行

定価：500円(税込み)
郵送料別途。



目次(抜粋)
【はじめに】
沖縄現場セミナーに望むこと
日本福祉文化学会 会長
馬場清

【基調講演】
戦争と福祉～今なお引きずる沖縄戦と米軍占領～
フリージャーナリスト 山城 紀子

【シンポジウム】
戦争と福祉～沖縄を考える Part 1～平和の文化を育てるために

シンポジスト：山城 紀子(フリージャーナリスト)、
仲地 博(沖縄大学 学長)、浅井 春夫(立教大学 教授)、
結城 俊哉(立教大学 教授)
コーディネーター：藺田 碩哉(日本福祉文化学会 顧問)

【現場セミナーへの思い】
日本福祉文化学会 副会長 永山誠/日本福祉文化学会 顧問 藺田 碩哉/沖縄福祉文化を考える会 会長 佐久本 真智子/沖縄福祉文化を考える会 事務局 長 安里 和子/日本福祉文化学会 副会長 岡村 ヒロ子

【お問い合わせ】
日本福祉文化学会事務局
FAX：029-896-9386
E-mail:fukushibunk@lagoon.ocn.ne.jp

ケアの本質とあるべき姿を学ぶ

9月16日、茨木市福祉文化会館において、学習会「ケアのフォークロア～暮らしの中からケアの基本原則と視点を学ぶ～」を開催した。これは日々、対人援助の現場(家庭・施設・支援機関)で働くケアの担い手の暮らし(日常生活世界)の中に宿る「ケアの本質」について考えることを目的に開催された。講師は、立教大学コミュニティ福祉学部教授で、本会評議員である結城俊哉氏。参加者は35人。

講演では当事者、ニーズの本質、援助者の役割を押しえたうえで、援助の関係性に言及。「山あらしのジレンマ」を避けるために、一定の距離を保つこと、さらに「無害で有能な援助者」であることの重要性を語った。対人援助職の病理については「燃え尽き(バーンアウト)症候群」の3条件として、①休めない、②報われない、③思い入れ過ぎを指摘し、健康指標として、曖昧さ、待つこと、余力を残すなどの重要性を示した。



第9回「歌で学ぼう岡山ESD」

開催日時：平成30年1月30日(火)
会場：岡山シティーミュージアム

岡山には、県内に端を発し、他県を通らずに海につながる1級河川が3本あります。これは47都道府県の中、北海道を除いて岡山県のみ。大変誇らしいことではありますが、水質管理において、非常に残念な状態であるとも聞きます。

そんな中、長年に渡り「水質の改善は3本の川に流れ込む無数の支流・源流への意識改善から」と、様々な研究・活動を行っておられる旭川流域ネットワーク様の活動を知りました。

そこで山田方谷、岡山空襲、ESD…等、様々なテーマで、専門の講師の方々によるご講演と音楽を絡めた「歌で学ぼう岡山」の第9回のテーマは「水」に決定。旭川流域ネットワーク様より講師をお迎えし、水、川にまつわる歌を参加の皆様と歌います。そして、美しい命の源を、未来に引き継いでいくための一助を成したいと考えています。



第5回九州ブロック熊本大会報告

10月21日(土)に社会福祉法人寿量会の地域密着型特別養護老人ホーム天寿園 NeO ホールで開催された。大会長は米満淑恵寿量会理事長。参加者は30名程。熊本大会の成果と特徴はつぎのとおり。

- 施設見学によって寿量会の福祉文化実践とデザインのレベルの高さを実感。
- 熊本地震災害に対する「福祉避難所」と被災後の食事提供は「災害と福祉文化」の独創的な実践そのもの。
- くまもと発の「アール・ブリュット」(生の芸術)の特別講演と作品の展覧。
- 天寿園の創造的な福祉文化実践報告(①ボランティア活動と地域交流、②文化のある暮らしと地域交流、③人生の看取り)は「学術発表」としても充実していた(レジュメ、研究倫理配慮、パワーポイントの発表法等)。
- 記念講演「アンパンマン学と福祉文化」は初公開。
- 美味しく楽しい料理(昼は手作りの「だご汁」、夜はオカリナ生演奏で懇親会)。
- 寿量会の福祉文化実践は一番ヶ瀬福祉文化の創造的実践そのもの。
- 熊本大会用の独自のオレンジ袋(レジュメと資料はA4カラーで約90頁、手作りの鈴付きストラップのお土産他)。

熊本大会は洗練された見事な「福祉文化・おもてなし」満載であり、主催者に感謝したい。なお、大会の写真関係は学会のホームページ参照。



2017年度関東ブロック研究交流会報告

11月11日(土)立教大学池袋校舎において「事例を通して人権問題を考える part2～学校教育の現場を中心に～」をテーマに研究交流会を開催しました。話題提供者：鈴木利子氏、前嶋元氏、島田治子氏

鈴木氏がかつて荒れたクラスの担任になった経験がある。その背景には、児童の心の荒れ(自分でも理解できない不安感があり、行動の自己抑制ができない)が内在していることに着目。まず、「人として生きる権利の学習」に取り組む。児童に身につけさせたい3つの課題を設定し、自分たちの今までの生活を振り返りながら学級憲章を作ったり、「世界人権宣言」を学んで関心を持ったことをまとめて発表したり、さらに人権意識の連続性を図るため、各教科内容と関連性をもたせた学習をするうち、次第に児童の意識や生活に変化が現れた事例が語られた。しかし、この方法はどのクラスでも効果があったのではない。10年にわたる実践の中で、児童や保護者の他者に対する「無頓着さ」や「人やモノにも無関心」的傾向がみられるクラスには効果が薄いことも語られた。

前嶋氏は中学校スクールカウンセラーの立場から「不登校児」の事例を紹介。各学校に相談室があるわけではなく、カウンセラーの訪問機会が少ない実態が語られ、支援に限界が感じられるという。また、島田氏の話からは教育者の過重労働の実態や、メディア報道の在り方から無意識のうちに我々も人権意識の希薄さに侵されていることに、改めて気づかされた。